

# 音 今 の 町 崎 黒

## 新聞からたどる黒崎の歴史 (七十一)

### 大正 自動車の需要は河原中期から後期へと急速に伸びていった。

(先月号からの続き)  
談話、訪問、外出の際等の興味、かくの如き変化を取り除かれた彼らの精神は常に其の目的とする仕事のみ集中する、ことになり、神経組織の過労が其の報酬となるに至ったのである。

#### ◎徒らに急ぐ習慣

自動車常習者のさらなる欠点は、徒らに必要なる急ぎとなく感覚が養われるということである。彼らは急ぐ用があつてもなくても其の目的地に急ぎ、不必要な急ぎを以て其の用を便ずるといふ風になり、其の結果このために自ら苦しむこととなる。例えば他人と汽車旅行をしても彼はしばしば静かに座っていることもできず、絶えず不安の状態にありて必要な休息をとることができないことがある。面白い話がある。或る自動車常用者が一日自動車故障のため汽車によって出勤すると、途中にて以前常に汽車にて出会いつ、あつた友人に会して、むしろ自動車故障のために非常なる興味を感じその日午後

(七十一)

車はいち早く一般に認められ、大正中期から後期へとその需要は急速に伸びていった。以下は新潟市を中心とした下越地区の自動車台数の増加及びその普及の状態を、新潟新聞によつて年表式に記してみる。  
大正二年六月八日記事  
新潟に乗合自動車開業

市内乗合自動車はいよいよ本日より開業す。左記の各所に停留所の目標を設置し一時間毎に往復す  
予定なれば乗客は最寄停留所に待合すべしと、因に乗車賃は市内八錢均一なりと。

以下市内の停留所  
越後線白山駅前、白山橋前、鍛冶小路、古町六味方屋前、坂内小路、風間小路、古町十四番町、本町五番堀、本町四番堀、本町三番堀、征谷小路、万代橋下、新潟停車場前

新潟に初めて登場した乗合自動車の路線は越後線白山駅前を起点に新潟停車場前までだった。乗車賃は市内どこま

で乗つても八錢均一。万代橋を渡つた沼垂地区が路線にないのは、当時同地区はまだ新潟市でなかつたことと、現在のように石やコンクリート製の橋ではなく、木製であつたためと思はれる。

注 新潟市と沼垂(當時は中蒲原郡)が合併したのは、その翌年大正三年だった。

#### 大正四年二月六日記事

「佐渡と自動車、五台で郡内を馳驅」という記事が載つたが実現しなかつた。

#### 大正四年九月四日記事

選挙運動員の車事故

去る二四日午後三時ころ県議員候補者の運動員を乗せた人力車と馬車挽業の馬車が西蒲原郡灰方村にて衝突し、人力車は滅茶苦茶に破損せしより直様燕分署へ来り損害補償申出でたるも所轄違ひとし却下されたるが馬車には規定の住所氏名の標札を附し置かざりし康により科料金三十銭申附けられる。

黒崎はもち論、近辺町村にまだ自動車が一台中なかつたころの大正四年に起つたこの車事故。「オヤッ」と思つてよく見れば、なんとそれは人力車と馬車の交通事故だった。

#### 大正八年六月六日記事

佐渡に自動車運轉の計画

相川銀行頭取渡辺七郎氏が佐渡郡内交通機関の完備を計らんがため、合名組織を以て資本金三万円位の見込にて自動車会社を設立せんと意考

あり、新潟市の某有力者及び松栄俊三氏が協議に加わり、総ての設計を立てんがため技師を聘して実施踏査をすることになり、技師渡航したるを以て両津、畑野、新町を経て河原田に達する道路、両津より吉井、金沢を経て相川に通じる道路の調査をなし、その結果充分算立てば差し当り自動車三台を購入し、一台は前者國中線に充て、一台は後者両津、相川間を運轉し、残る一台を予備にあて午前、午後一回宛往復する見込なりと。

自動車三台で佐渡に自動車会社を設立しようという計画。しかし、この計画の四年前、大正四年の新聞に「佐渡で自動車」と題し、郡内を五台の自動車を馳駆する案が載つたが実現しなかつた。

今回は佐渡相川銀行の渡辺頭取が佐渡に自動車会社の設立を企画。これに新潟市の某有力者が加わり技師を送つて実施調査をすることになった。其の結果成算が立てば三台の自動車を購入して郡内を運行するというもの。  
大正八年八月二十五日記事  
水原、村杉方面に乗合自動車開通

#### 大正九年一月十八日記事

県下の自動車十九台

在の自動車総数は大正八年末現しが、其使用別を見るに貸自動車六台、乗合自動車十台、家用自動車三台。(続く)

